

舊作の回顧

泉鏡花作

明治四十二年四月

私の處女作は『冠彌左衛門』と云ふのです。尤もこれは最初に活版になつたのでして、處女作と云へるか何うかは知りません、と云ふのは、此作の以前に書いたもので、これを出した後に雑誌に載せた作が澤山あるんですから、眞箇に最初に書いたものは言へませんが之に就て些つと面白い話があるのです。

と云つては何ですが、丁度それが私の十九か二十の時でしたね、まだ紅葉先生の玄關にゐた頃でしたが、其頃巖谷小波さんが、京都の日の出新聞から、何か書いてくれと頼まれたのです。然し小波さんは當時忙がしかつたものですから、紅葉先生の處へ來られて誰か外に書く人はないでせうかと云ふ相談でした。すると先生は、それでは家の泉に書かせようとの事で私が愈々書く事になりました。何しろ始めて名を出すのですから随分意氣込んで書いたもので

す。今のやうに一回三枚半なんかと定つてゐなかつたんで、一回分七枚も八枚も書いた事がありました。始めの間は大凝に凝つて書きました。それに私の癖として、印刷にならぬ前に、自分が読んで人に聞いて貰はねば氣が済まぬので、小栗君や柳川君などは、随分私の爲に聞かせられたものです。自分自身は聞いて貰ふ事が嬉しいので、先きでも必ず喜んでるだらうと思つてると大違ひ、皆苦い顔をしてゐました。併しそれでも頼んでは聞いて貰つたものです。すると或日先生が、

「泉、お前は大層皆を弱らせると云ふぢやないか」と云はれまして、始めて氣がついた様に止めましたが、そんな風に変な熱心で書いて居たんですから、嚙先方——京都の讀者です——でも大評判だらうと、獨合點してゐる、どうでせう、巖谷さんの方に十九通と云ふ不足狀が來てゐるんです、それが皆あの『冠彌左衛門』は止めて貰はう、さうでないといひ一日と讀者が減つて了ふ。誰か外の人と換へられるなら換へて、若しそれが出來なかつたら本人に止めさせるかどうかして呉れ、讀者に對して済まぬから、と八釜しい不足狀なんです。巖谷さんも先生の

處ところにそれを云いつて來きて、何どうかならんか、やかましくて仕方しかたがないと云いはれたさうですが、先生せんせいは若いものものにそんな事ことを云いつて、失望しつぱうさせるのは可哀相かはいさうだから、まあ／＼と巖谷いはやさんを宥なだめて歸かへしたさうですが、驚おどくぢやありませんか、十九通じゅうつうですよ。

しかし私わたしは些ちつともそんな事こととは知しりませんから、鼻高々はなたか／＼と豫定よてい通り四十回書くわいきましたが、後あとで其話そのはなしを聞きいて全まったく冷汗ひやあせをかきました。

それから二三ヶ月経げつたちまして、都合つがふで加賀かゝの金かな澤ざは一こきやう故郷こきやうです一かへに歸かへらねばならぬ用事ようじが出來でて歸かへりましたが、目的もくてきの用事ようじを濟すしてからは、別べつに仕し事もせず、毎日まいにちぶらり／＼町中まちぢうを歩あるいて居ゐました。

丁度ちやうどある町まちの中程なかほどまで來きて、ふと目めを上げると、北ほく陸新聞りくしんぶんと云いふ新聞社しんぶんしゃでして、その前まへの格子かうしを見ると、不思議ふしぎにも『冠彌左衛門かんむりやざゑもん』が載のつて居ゐるのです。それで家うちへ歸かへつて近所きんじよの評判ひやうばんを訊きいて見みますと、案外あんぐわい此方こつちぢやいゝのです。それで大變たいへん乘氣のりきになり、其その新聞社しんぶんしゃに行いつて相談そうだんしたら、小説せうせつを出だしてゐる本人ほんにんだから、雜報位ざつぱうぐわいは書かかせてくれる、さうすると小使こつかひ

の不自由はないと、心をときめかしながら受附に行つて聞きました。すると部長見たいなのが出て来て、剣もほろろの挨拶なんです。それで私も大失敗して歸京した事がありました。

も一つはね、それから二三年も経つてからで、最うぼつ／＼文藝俱樂部や、外の雑誌に出るやうになつてからのことです。國の新聞――北國新聞です、前のと違ひます頼まれて書いた事があります。それは「黒猫」と云つて、少しヒュードロ掛つたものです。その掲載中、一時國へ歸つて居りましたが、一日洗湯に行きますと、その家の主人が「黒猫」の出て居る新聞を見てゐます。これはいゝ、一つ評判を聞いて見ようと思ひまして、大急ぎで一風呂流して上りました。

表面から直截に話しかけては駄目だらう、自然の評判を聞くには、どうしても自然に云はせねばと、種々心配した末、自分も新聞を見ながら思ひ切つて、「なんですか、この前の小説はどうです」とやつたんです。すると、この前のは大變面白かつた。

「何とか御殿」と云つて一日を缺かさず讀んだが、
今度のはさつぱり譯の解らん、面白くも何ともない
小説だと云はれたんで落膽しました。無論本人の、
泉鏡花が其處にゐたことは知つては居りませんから、
決して飾つた言葉や、故意の言語でないのは勿論で
す。がさう思へば思ふ程、自分の小さい事に氣がつ
き、眞から厭な心地になり、二度目に歸京しました。

外に、さうですな、え、「夜行巡查」ですか、あ
れは半分先生の玄關にゐる頃書いたもので、後半は、
私が博文館付となつて、大橋乙羽さんの家に移りま
した折、其處で書いたものです。

あゝ、それからこれは外の談ですがね、私はあの
濁音のある言葉で女を形容するのは嫌ひです。例へ
ば、しゃくりあげると云ふ言葉があるでせう。あの
言葉は本字で書いてあると別に異つた感じもしませ
んが、假名文字になると、何となく相應しくないので
す。尤も亂暴な女なら兎も角、美しい、優しい女
を形容する場合には、多少の注意を拂つてゐます。

それから、先刻話しました、自作を讀んで聞いて貰ふと云ふことですね、あれで私は非常に益した事があります。それはかうなんで、私がずっと讀みながら、半分は聽く人の方を注視して居るのです。すると聽く方でも、不味い文句、乃至、ごまかし文句、或は調子を損ずる文句などに打突かると、自然と顔の色を變へます。そこで成程、彼處は可けない、あの文句は厭味だと思つて、覺えてゐて後で直すとか、終ひには、先方に不味い文句を聞かせたくないと思ふ心から、讀んでる中に先の不味い文句を直したりするやうになりました、柳川君や小栗君等には誠に濟まなかつたが、自分にとつては大變に利益があつたのです。(話。)